

# 近代文学と口承文芸

工藤 茂

## はじめに

日本の近代文学を調査していると、そこには、否定しようもなく口承文芸の影響が現れていることを知る。

明治以降、両者は次第に離れていく傾向を示していた、と文学史は語り、文芸辞典などにもそのように書かれている。しかし、実際にはそう断言することのできない面を持っているようである。たとえば、森鷗外のある小説——「百物語」などは、前時代的な口承文芸やそれにまつわる俗信を、科学的に排する態度で書かれながら、逆にそれらのものがその小説に一つの効果を付与する役割を担っているように読みとることができる。

そこで、近代文学の中に口承文芸の影を探り、近代文学の一つの大きな流れとして、それを近代文学史の中に位置づけてみたい。

## 一 近代文学と大分の伝説

菊池寛の小説に「忠直卿行状記」「恩讐の彼方に」「蘭学事始」

という作品がある。いずれも大分県に関連のある小説である。最初の小説は、越前六十七万石の大名から、豊後国府内に配流され、法名を一伯と付けられ、その晩年を豊後津守で送った越前少将忠直を主人公にした点において、大分県と関連する。歴史上の人物に仮託して、人間不信という近代的な人間の心理を具象化したこの小説は、カミュの「カリギュラ」にも比すべき優れた小説と考えられる。事実、彼の「半自叙伝」によると、この小説の原型は「斯論」という雑誌に発表した二十枚ほどの小説「暴君」であったという。

菊池寛はこの小説を必ずしも忠直の歴史的事実に従って書いてはいない。たとえば、忠直が家来の話を立ち聞きして人間不信に陥る設定は、彼の「半自叙伝」によると、次のような彼自身の体験が下地となって作られたものらしい。

高等師範の学生の時、彼は岡倉由三郎の英語の成績で乙をとった。彼にはFという親友がいた。そのFが他の二三の友人に「菊池は、英語は乙じゃないか。あれで自慢するからな」と言っているのを立ち聞きしてしまう。彼はそこに「私は、そのFとは可なり親しい間であっただけ、心を傷けられた。私の『忠直卿行状記』の立聞きは、そんなところから、ヒントを得たのかも知れない」と書いて

いる。

また、福井市の歴史家舟沢樹氏は、「菊池寛の小説はあくまで創作。語り継がれる乱行もほとんどが中国の暴君伝説の焼き直し。忠直配流の真相は、当時の歴史的な背景の中にこそ求められるべきだ」と語り、忠直は、「狂気どころか、むしろ地元の人々には愛される主君ではなかったか」と述べている。<sup>(1)</sup>つまり、忠直配流の原因を当時の政治的背景——徳川二代将軍秀忠の政権安定のための犠牲、と見るのである。

忠直の靈廟は大分の浄土寺にあるが、その他の所にも存在する。福井のそれは、前出の舟沢氏によると、忠直を慕う農民が大分まで出かけ、屋敷跡の土を持ち帰って忠直卿の墓を作ったのだという。このような忠直の墓の複数の存在は、既に不遇な生涯を終えた武人忠直の、伝説化された伝承の姿を示すものであろう。

菊池寛の小説「忠直卿行状記」は、歴史の真実に迫ろうとしたものではない。疎外された人間の心の真実を追求した作品であった。そのために有効に働いたのが、忠直伝説だったのである。

次の小説「恩讐の彼方に」は、耶馬溪にある青の洞門の伝説を素材にした点において、大分県と関連する。この小説はその題名が示すように、△恩讐▽を超えたところにある人間の高次の感情を描こうとしたものである。菊池寛には他に「恩を返す話」「ある敵打の話」「仇討三態」という短篇がある。前者は報恩の徳の、後二者は仇討という古いモラルの矛盾を抉り出した小説であった。これらの小説はそういう意味において、森鷗外の「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」のモラル観を受け継ぐものといえることができよう。そ

して、「恩讐の彼方に」もまた、この系列にくみ入れることのできる小説であった。

ところでこの小説の梗概は、小野茂樹氏の「大分県と文学」<sup>(2)</sup>に引用されている「羅漢寺記録」「地方に伝わる口碑」のそれと、殆ど重なっている。同じく同書に引用されている劉寒吉氏の「青の洞門」の一文には、氏が耶馬溪研究家の山本聰治氏から聞いた話として、以下のようなことが述べられている。

羅漢寺の下手に智剛寺という寺がある。その住職が、明治のはじめごろ、村芝居の台本として村の青年達に書き与えた、禅海物語とでもいうようなものがあった。菊池寛が耶馬溪に来た時、寺に立ち寄ってそれを見た。彼は後にその筆写本を送ってもらい、その本と簡単な名所案内のパンフレットによって、「恩讐の彼方に」を書き上げたのだらう。

このことについては、菊池寛来訪の年月日の調査その他、残された課題が存する。だが小野茂樹氏の前引書による限り、青の洞門にまつわる禅海伝説は、菊池寛の執筆以前に、飛驒の俳人竹母の「筑紫みやげ」、三浦梅園の「梅園拾葉」、高浜虚子の「耶馬溪」と題する紀行文などに書き留められていたことが分かる。したがってこの伝説が、菊池寛の小説に先行していたことは、疑いを容れない事実であろう。彼はこの伝説に△恩讐▽の彼方にある、光輝にあふれた人間の感動を読み取って、一篇の小説に仕立てあげたのである。

最後の小説「蘭学事始」は、大分の伝説と直接関係はない。ただ、中津奥平藩の医官前野良沢が登場するという点において、大分県と関わっている。この小説の主人公は杉田玄白である。その玄白の心

裏に重い陰影を描いていく、「解体新書」に名を連ねることを拒んだ、性狷介なる良沢。その良沢が重要な人物としてこの小説に登場してくるので、ここに挙げてみたのである。

大分県合同新聞社の梅木秀徳氏がまとめた、「大分の伝説」(昭49)の下に、傾山の吉作おとしの伝説が収められている。傾山にいわたけ取りに出かけた吉作が岩棚に降りて、身を支えている綱を離れたところ、伸び切っていた綱が縮んで上にはね上がり、手の届かぬところまで綱の端が跳んでしまった。岩棚にひとり取り残された吉作が呼べど叫べど、誰も救助に来てくれない。里人は傾山から異様な声がするので、かえってそれを怖れていたという。吉作が岩棚から空を仰いでいると、鳥が飛んでいる。いつか吉作は自分が鳥になった思いにかられ、岩棚から飛び降りて死んでしまった。今にそこを、吉作おとしと呼んでいる。

以上がその伝説の梗概である。この伝説を聴いていて直ちに思い出すのが、国木田独歩の「春の鳥」である。

独歩は明治二十六年九月に佐伯に来て、一年ほど佐伯に滞在した。佐伯の美しい自然は、独歩の内部に抜き難い影を落としていった。後に彼は、「豊後の国佐伯」をはじめとする「源叔父」「鹿狩」「春の鳥」などの、素晴らしい作品を生むことになる。

「春の鳥」は佐伯の城山を背景に、六蔵という白痴の少年を、愛情を込めて描いた小説である。この六蔵は鳥が好きで、鳥を見てはそれが何であるかと「からすからす」と言っている。その後を追いかけ、鳥の飛ぶしぐさをしている。が、遂に城山の一番高い石垣から落ちて、自然に帰っていく。登場人物の「私」は、それを少年が鳥

に同化してしまつて、石垣から飛んだのであろうと想像する。

この六蔵にはモデルがあった。独歩が下宿していた坂本永年の家に同居していた、山中泰雄という人である。小野茂樹氏の調査によると、この人は実は六十七歳まで生きていた。独歩自身も「予が作品と事実」の中に、「只城山で悲惨な最後を遂げたという事だけは予の想である」と書いている。したがって、六蔵が城山の石垣から落ちて死ぬというのは、独歩の虚構であった。だがこの虚構に、吉作おとしの伝説と重なるものがあることは否めない。現在の段階では、吉作おとしの伝承に「春の鳥」が投影しているのか、あるいは、吉作おとしの伝説が「春の鳥」に影響を与えたものか、私には不明である。しかし、この両者の重なり合いに、私は、近代文学と口承文芸との微妙な交流の姿を見る思いがする。

その他にも、大分の伝説が近代文学として甦ってきたものに、白石一郎の「幻鳥記」、阪田寛夫のオペラ台本「吉四六昇天」、中沢とおる氏の「大分県民演劇台本」などのあることを、ここに付け加えておきたい。

## 二 近代文学と口承文芸

芥川龍之介の初期の小説に「老年」という作品がある。この小説は一見どこにも口承文芸の影響を受けていない小説のように見えながら、実はそこに間接的な影響の潜んでいる小説なのである。

芥川はこの小説を書く時点において、既に森鷗外の「百物語」を<sup>(4)</sup>読んでいた。そして、この「百物語」と併わせて一対となるように

「老年」を創っていたのである。その例を挙げてみよう。前者は季節を夏に設定しているのに対して、後者はそれを冬とする。主人公に關してもこの対比は同じである。前者は三十歳ぐらいでありながら既に老人じみた飾磨屋を設定しているのに、後者は六十二歳になるが心の中に若々しい情念の炎が残っている房さんを設定している。しかも、前者の主人公は、その服装、顔色ともに憂鬱な青の色調で染められているのに、後者のそれは、和服は明るい黄、帯は茶の色調で描かれている。つまり芥川は、鷗外のネガティブな「百物語」からカラーで焼き付けたような手法を用いて、自分の「老年」を作り上げたのであった。

ところで鷗外は、西洋的な合理精神によって、百物語という前時代の文芸趣向を否定しながら、小説「百物語」を書いていく。しかし、その小説が出来上がってみると、いつしか自分の拒否しようとした百物語の趣向どおり、そこには怪物性を帯びた飾磨屋の像が浮かび上がっていた。これが小説「百物語」の特異なところである。ここに私は、近代文学と口承文芸との不思議な邂逅を見るのである。この「百物語」に俳諧の移り付けのように付けられた「老年」には、かすかながら百物語の火影がゆらめき、老いをせめる色恋いの炎に身を焦がす房さんの、妖怪じみた老年像が、雪の夜に浮かび上ってくる。そういった意味において芥川の「老年」もまた、口承文芸と交渉を持っていたのであった。

森鷗外の「山椒大夫」も、口承文芸とは切り離すことのできない小説である。なぜならば、その典拠とされるものが、中世に生まれしてきた語りものの説経節なのだから。現在、小説の典拠を寛文七年

山本九兵衛板とするのが定説のようになってきている。だが、その内容を詳細に検討した結果は、鷗外が「山椒大夫」を書く直前に彼の許に配本になった「徳川文芸類聚」所収の「さんせう太夫」が、秦行正氏の指摘のように適当と考えられる。しかし、ここで問題にしたのはそのことではない。近代文学の研究が鷗外の小説の検討を媒介に、否応なしに口承文芸の世界にたどり着いてしまうということである。

説経節といへば、そこに説経「かるかや」がある。「さんせう太夫」の正本のように、「かるかや」の正本には太夫名が明記されていないが、この石童丸の語りものは、実は井上靖の短篇「月の光」の中にまで流れこんでいる。この小説は手求め親求めのモチーフによって構成されている。その中で老母の語んじるのが石童丸の物語である。それは説経節のそれではなく、和讃のそれなのだが、この口承文芸の親求めのモチーフは、小説「月の光」のそれと重層しながら、この小説に古典的な色どりを与えていくのである。

以上のような観点から近代文学を検討し直していく時、明治以降の文学史に新しい水脈のあることを知る。たとえば、近代文学に現われた浦島伝説の系列としての、坪内逍遙、森鷗外、幸田露伴、武者小路実篤、太宰治の諸作品。あるいは、大江小波「姨捨山」(『日本お伽斬』)、森林太郎、松村武雄、鈴木三重吉、馬淵冷佑同撰「標準於伽文庫」の「姨捨山」、太宰治「姨捨」、堀辰雄「姨捨」、柳田国男「親棄山」、里見淳「姥捨」、井上靖「姨捨」、深沢七郎「楢山節考」、水上勉「じじばの記」といった姨捨伝説の系列。そしてこれらの系列を含み持つ、さらに大きな流れをたどってみると、次の

ような作家、あるいはその作家のある作品が浮かび上がってくるのを知る。<sup>(6)</sup>

二葉亭四迷「浮雲」、森鷗外「蛇」。「百物語」「山椒大夫」。「最後の一句」「高瀬舟」尾崎紅葉「二人比丘尼色懺悔」その他、泉鏡花、夏目漱石「夢十夜」、芥川龍之介の諸作、志賀直哉「転生」「死神」、宮沢賢治、釈道空、柳田國男、井伏鱒二、太宰治、坂口安吾、石川淳、加藤道夫「なよたけ」、木下順二「夕鶴」「彦市はなし」、木山捷平、石坂洋次郎、大岡昇平「将門記」、宇野千代「おはん」、中野重治、福永武彦、大江健三郎、円地文子らのある種の作品、真殿駿「鬼道」、植木学「花のいろいろ」、井上靖、深沢七郎、須知徳平、中上健次。

島崎藤村の「破戒」、志賀直哉の「暗夜行路」なども、視点を變えて貴種流離譚の観点から読み直してみると、たちまちその容貌を改めていくような思いがする。

## むすび

現在、日本近代文学史を図式化する場合、次の三つの観点があるように思う。

### 一 近代自我史観

### 二 求道者と認識者に分ける伊藤整の見方

### 三 平野謙の三派鼎立説

右の観点にもう一つ加えて、近代文学の中に避けようもなくその姿を現す日本文芸の伝統、あるいは口承文芸の系譜をたどってみよ

うというのが、私の試みている方法である。

### △注▽

(1) 「朝日新聞」(昭55・11・8・朝刊)の「石碑をたずねて—

—松平忠直

(2) 小野茂樹著「大分県と文学」(昭42・5・3・大分・藤井書房)

(3) 小野茂樹著「若き日の国木田独歩—佐伯時代の研究—」(昭34・12・5・アポロン社)

(4) 芥川の「老年」は大正三年五月一日発行の「新思潮」(第一卷第四号)に発表された小説であるが、その前年の八月十九日付の広瀬雄宛書簡に、「百物語」を読んだことが書き付けられている。

(5) 秦行正『山椒大夫』の方法—その典拠をめぐって—」

(「福島大学研究所報」第38号・昭53・9)および、拙稿「森鷗外『山椒大夫』考(一)—その典拠について—」(「別府大学紀要」第23号・昭57・1・30)参照のこと。

(6) 「口承文芸の展開」(昭50・1・25・桜楓社)所収の拙稿「口承文芸の片影—近代の文学をめぐって—」を参照のこと。

(なお本稿は、大分県別府大学で行われた日本口承文藝學會昭和五十九年度大会での公開講演の要旨を、まとめたものである。北京にて。)

(くどう しげる・別府大学)